

捨て場からみえる縄文人の暮らし

はじめに

富山市^{はま}黒崎野田・^{ひらえ}平榎遺跡は、富山市北東部の常願寺川下流左岸扇状地上に立地し、海岸から約1.5 km内側に入った位置にあります（図1）。標高は約3～5mです。縄文、弥生、古墳、奈良、平安、鎌倉、室町、江戸時代に及ぶ複合遺跡であり、あいの風とやま鉄道の野田踏切周辺では古くから縄文土器や石器、玉類などが採集されることが知られていました。

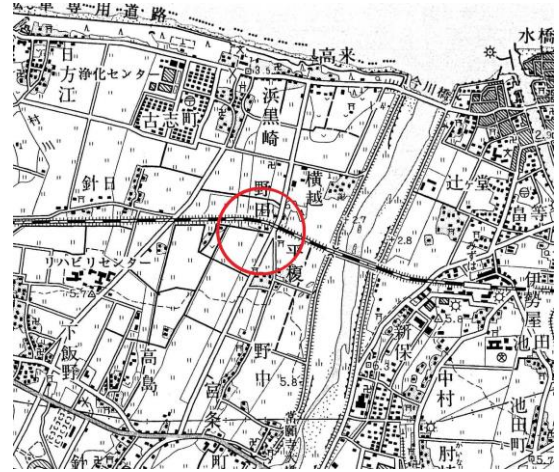


図1 遺跡位置図

縄文時代後～晩期の土器捨て場

平成7（1995）年に県営ほ場整備事業に伴い、富山市教育委員会が発掘調査を実施しました。このうち遺跡の北西側では縄文時代後期後半～晩期前半（約3,500年前）に形成された土器捨て場の一部を確認しました。

土器捨て場は、遺跡の西側を流れる諏訪川の流路跡（傾斜地）を利用したと考えられ、厚さ2m以上の堆積がみられました。土層をみると、下半部では植物繊維、鉄分の混じる暗褐色・黒褐色の水分を含んだ粘質土となり、縄文土器や石器のほかクルミやトチといった種子などの遺物が多く含まれていました。発掘調査面積は、500 m²ほどでしたが、コンテナ（60×40×15 cm）で400箱分もの遺物が出土しました。



写真1 遺物出土状況



写真2 遺物出土状況

土器捨て場からの出土品

土器捨て場からは大量の縄文土器、石器類、木製品、種子、自然木などが出土しました。

縄文土器には、深鉢や浅鉢、蓋、注口土器、ミニチュア土器などがあり、土器の型式では縄文時代後期の井口式から晩期前半の中屋式と呼ばれる時期に属します。また赤漆や赤い顔料（ベンガラ）で彩られた土器もあり、それらは日常用ではなく、祭祀など特別な日に使われたと考えられます。

石器類には、石鏃、石匙、磨製石斧、打製石斧、砥石、敲石、石皿などがあります。石器の素材となる原石や剥片、製作途中の未製品もあり、集落内で石器づくりが行われていたことを物語っています。磨製石斧をみると、①原石→②打ち割り（側面などを打ち欠く）→③敲打（つぶして形を整える）→④研磨（磨く）→⑤完成の5つの工程がうかがえます。



写真3 磨製石斧の製作工程



写真4 土製耳飾り

土製品には、土製耳飾り、有孔球状土製品、土玉、円盤形土製品、土製垂飾品、土偶、遮光器土偶などがあります。このうち土製耳飾りは十文字状の透かし彫りのみられる大型品（径5.2cm）のほか破片を含めて16点出土しており、当該期のものと比べると県内では朝日町境A遺跡の24点に次ぐ多さです。また、遮光器土偶は右腕部分で、先端がS字状となっているのが特徴です。

木製品には、弓、刻みのある装飾棒、削り痕のある掘り棒などのほか、多数の加工木、丸太材などがあります。このうち弓（写真5）は長さ45cm、幅2.5cm、重さ160gの大型品で、約2/3が残っていました。イヌガヤを用いており、先端部には弦を取り付けるための切り込みがみられます。



写真5 木製弓

おわりに

浜黒崎野田・平榎遺跡の縄文人は集落の近くにあった傾斜地を、破損した土器のほか、使わなくなった道具などの捨て場に利用していました。傾斜地は水分を含む低湿地であったことから、木製の弓や種子、自然木など高台の集落では腐って残らないような遺物もみられました。捨て場には縄文人の暮らしを解明する手掛かりが多く残されており、現代の私達にとってはまさに「宝箱」といえるでしょう。

参考文献

- 富山市教育委員会 1995 『富山市浜黒崎悪地遺跡 野中新長幅遺跡 野田・平榎遺跡』
富山市教育委員会 1996 『富山市野田・平榎遺跡 野中新長幅遺跡 宮条南遺跡 高島島浦遺跡』

<http://www.city.toyama.toyama.jp/etc/maibun/index.htm>

編集・発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター